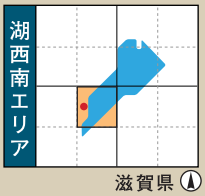
史跡
国指定

義仲寺境内（ぎちゅうじけいだい）

大津市馬場一丁目　昭和42年11月20日指定



木曽義仲の菩提を弔う義仲寺には、俳聖松尾芭蕉が止宿し、慕う門人達により建てられた無名庵（むみょうあん）は、「湖南蕉門」と呼ばれた俳人達の集う俳諧の中心地となりました。大津の風土を愛した芭蕉は死後、義仲寺に葬られることを遺言し、願いどおり、今も義仲の隣に眠ります。

当時のできごと	
1185年	平氏が壇ノ浦で滅びる
1569年	信長、義昭と不和
1687年	生類憐の令が出される

義仲と芭蕉

義仲寺は、室町時代の末頃に近江守護佐々木六角氏が、寿永2年（1183）の粟津の合戦で源義経に敗れ死んだ、木曽義仲の菩提を弔う寺を建立したことに始まると伝えられます。江戸時代の中頃までは、義仲の墓と伝えられる塚に根をおろす柿の木があるだけの小寺だったようです。しかし、この寺は知る人の多い寺であり、松尾芭蕉も心惹かれ度々滞在しています。特に元禄2年（1689）から2年余りも大津周辺に滞在しますが、この時の主な居住地が、義仲寺の草庵（後の無名庵）と幻住庵でした。元禄7年芭蕉は「ここは東西のちまた、さざ波きよき渚なれば、生前の契り深かりし所也」との遺言により、義仲寺境内に葬られました。その後、義仲寺は俳諧の中心として大きな役割を持つことになります。

境内

寺は旧東海道に面します。義仲の木造を祀る本堂（朝日堂）の左手に、義仲の墓があります。芭蕉の墓は義仲墓の左にあり、自然石に「芭蕉翁」「元禄七年甲戌十月一二日」と刻されています。墓の後ろには無名庵が建っています。この他、境内には芭蕉を追慕して翁堂が明和6年（1769）に、蕉門の遺品や俳書を納めた粟津文庫が寛政3年（1791）に建立されています。また、山門前右手には里人が巴御前の冥福を祈るために祀った巴地蔵堂があります。

義仲寺境内にはこの他多くの句碑が立ち並び、木々の緑と相まって、こじんまりと落ち着いたたたずまいを見せています。



東海道に面する義中寺の門

［義中寺境内にある俳句］

境内には、全部で26基の句碑があり、見る者の気持ちを彼の時代へといざないます。その内の一部をご紹介します。

旅に病て　夢は枯野を　かけ廻る	芭蕉翁（芭蕉辞世の句）
古池や　蛙飛びこむ　水の音	芭蕉翁
木曾殿と　背中合の　寒さかな	又玄
葉を配る　その根やここに　冬木立	角上
おもふまま　月夜にあひぬ　遅さくら	車友
時雨する　雲をはつして　湖の月	鳳羽
行燈の　ひとり消えけり　けさの秋	乙也
粟津野に　深田も見えす　月の秋	露城
月の湖　鳰は浮たり　しつみたり	魯人



義仲寺（『近江名所図会』）


翁堂

関連する文化財

幻住庵（大津市）	松尾芭蕉が滞在した草庵。大津市国分の近津尾神社にある
竜ヶ丘俳人墓地（大津市）	芭蕉門下17人の俳人の墓。大津市竜ヶ丘にある
今井兼平墓（大津市）	木曽義仲四天王の一人。義仲の跡を追って粟津で自害

もっと深く知りたい

大津市教育委員会　☎077-528-2638　大津市御陵町3-1



義中寺境内へのアクセス　JR琵琶湖線　膳所駅下車
京阪電鉄石坂線　京阪膳所駅下車

【参考文献】〔図説日本の史跡〕同朋舎　〔近江の遺跡〕（財）滋賀県文化財保護協会　〔大津の文化財〕大津市教育委員会

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　平成16年3月